報告 3
Gold-QPD 関係

統合医療による認知症 Gold-QPD 育成講座の現況報告と展望

常務理事
学校法人後藤学園　中医学研究所所長　**兵頭　明**

一、　認知症に対する鍼灸治療の可能性をさぐる

平成 21 年（2009 年）10 月 31 日に文部科学省戦略的基盤研究・社会連携研究推進事業の一端として開催された認知症国際フォーラムのテーマは、「認知症に東洋医学が挑む」であった。その際にパネリストとして中国から招聘した天津中医薬大学・第 1 付属病院の韓景献院長は、健康長寿の考えをベースにした脳老化と骨老化に対する鍼灸治療（韓景献方式）の効果について発表された。さらにアルツハイマー病と血管性認知症 435 名の患者を対象とした鍼灸治療により、MMSE（認知機能検査）のスコアの改善、日常生活動作（ADL）の改善がはかられたことを報告された。この認知症国際フォーラムにおけるパネルディスカッションの様子は、同年 11 月 29 日に NHK 教育テレビ・日曜フォーラムでも全国放映された。

社団法人老人病研究会としては介護付有料老人ホーム舞浜倶楽部において施設連携、家族連携をベースとして、本人や家族の同意のもとで 1 名のアルツハイマー病の入居者、軽度認知障害の疑いのある 2 名の入居者に対して 1 年にわたって韓景献方式を実施し、ほぼ同等の結果が得られたことから韓景献方式を採用することを決定し、2010 年 10 月に第 1 回認知症 Gold-QPD 育成講座ブロンズコースを開講、2011 年 6 月に第 2 回認知症 Gold-QPD 育成講座ブロンズコースを開講した。また本年 6 月には第 3 回認知症 Gold-QPD 育成講座ブロンズコースが開講される。

二、　統合医療による認知症 Gold-QPD 育成講座の目指すもの

社団法人老人病研究会は超高齢化時代の医療的・社会的ニーズに応えるべく、高齢化社会の大きな課題である認知症と高齢者不定愁訴の治療を視野に入れ、すべての高齢者に対して全人的・総合的なアプローチができる認知症専門鍼灸師の育成講座を開講することとなった。本研究会が育成しようとする認知症専門鍼灸師は、認知症に対する高度な西洋医学的知識を備え、さらに中医学の考え方を共有し、認知症の方や高齢者への接遇介護法を習得し、所定の鍼灸技能（韓景献方式）を有する専門鍼灸師である。本育成講座の目指すものは、認知症のみを治療するのではなく、認知症の方を全人的総合的な視点に立ってサポートし治療することにある。

医療機関との連携、高齢者入居施設との連携、家族との連携のもとで、本プロジェクトは立ち上がった。今後、全国の多くの医療機関、施設、家族の賛同が得られ連携拡大と連携強化を図ることができれば、その連携のもとでより多くの認知症専門鍼灸師を一緒に育んでいくことが可能となる。社団法人老人病研究会としては、より多くの賛同と協力が得られることを切望するしだいである。

三、　認知症 Gold-QPD 育成講座の現況報告

現在までに第 1 期生 22 名がブロンズコース、シルバーコース、ゴールドコースを修了し、認知症専門鍼灸師としての称号「認知症 Gold-QPD 資格認定証」が授与された。また第 2 期生 26 名がゴールドコース研修中であり、続々と症例報告が本部に寄せられている。ゴールドコース生は週 1 回の頻度で鍼灸治療を行い、初回鍼施術前とその後 4 回施術ごとに MMSE と ADL の計測を行なっている。また治療中の患者とのコミュニケーションの様子についても詳細なる報告が寄せられている。中国伝統医学は 2000 年以上にわたってすべての患者さんに対する個別ケア、個別キュアを重視しており、認知症の患者とのこういったやり取りの記録は、とても貴重なデータとして今

後大いに役立つことであろう。認知症の患者が陥りやすい孤立感、閉塞感、自信喪失からの開放の一助となれば幸いである。

ゴールドコース研修生による50数症例の報告から見えてくるものとしては、初対面時は家族や信頼できる同伴者（キーパーソン）が不可欠であり、治療について説明しても初回施術を拒否されるケースもあるが、2〜3度目に受諾することが多いということ。また多くのケースで5回程度の治療で施術者を認識するようになったり、明るくなった、身体と頭が軽くなった、気持ちがよくなった等の感想が聞かれる。平均3ヶ月12回施術後には、周辺症状が緩和したり、落ち着きがでてきたり、コミュニケーションがうまくとれるようになったケースも多く見られる。また自立するための日常生活動作（ADL）に改善が見られ、これはその人と介護者の生活の質（QOL）を向上させ、それが自分自身を取り戻す効果につながっていく可能性が示唆される。まだ例数が限定されているため、現段階では明確な結論を提示することはできないが、その成果は大いに期待できる可能性を秘めている。

四、　将来の展望

昨年6月に日本医科大学同窓会館で開催されたパネルディスカッション「統合医療（西洋医学と中医学）による認知症治療の将来展望」では、認知症患者の家族から「鍼灸治療を続けることによって、次第に明るくなり、笑顔も出るようになり、先生との会話も生まれた。この経過を見ていると家族としてうれしくなります」との発言をいただいた。また介護施設・舞浜倶楽部のグスタフ・ストランデル氏からは、「認知症患者への鍼灸治療は、患者とその家族、施術者、施設のスタッフとの信頼関係が何よりも大切である。鍼灸治療は大きな希望が持てたので、全国の施設で認定鍼灸師が活躍できる日が待たれる」との期待が寄せられた。今後、全国のより多くの施設において認知症の方に対するケアとキュアのコラボレーションによる大きな成果が期待される。これは世界初の試みであり、いまだ未知なる領域である。そのためにも本育成講座の趣旨に賛同される多くの医療機関や施設の協力が必要とされている。

日本では2025年を目標にした健康づくりに関して、「70歳現役社会で高齢者の健康・働き甲斐・満足度・QOLを大幅向上、老若男女一人ひとりが志を持ち心身ともに元気」（2006年に開催された政府の第2回イノベーション25戦略会議）といった考え方が示されている。

本育成講座で習得する中医学の考え方にもとづいた所定の鍼灸技能（韓景献方式）は、もともと健康長寿実現に向けて開発されたものである。日本では現在、65歳以上の方は約3000万人に達しており、80歳以上の方は820万人を超えている。今後、社団法人老人病研究会としては鍼灸治療（韓景献方式）による健康長寿実現に向けた取り組み、認知症の予防に向けた取り組み、軽度認知障害（MCI）に対する取り組みについても会員一丸となって展開したいものである。